

## BHS、その本文の性格と問題点

——レニングラード写本 (Codex Leningradensis B19a)  
とビブリアヘブライカ・シュトゥットガルトンシア (Biblia  
Hebraica Stuttgartensia) をめぐる諸問題への考察——

本 間 敏 雄

### 序 論

一 一九六八年にイザヤ書をその始めとして順次出版され、一九七六年にその完結を見た印刷ヘブル語聖書ビブリアヘブライカ・シュトゥットガルトンシア (以下BHS)<sup>①</sup>は、その前身であるルドルフ・キッテル編ビブリアヘブライカ (Biblia Hebraica Kittel, 以下BHK、特に言及のない場合には第三版以降をさす)<sup>②</sup>を当然前提とし、また意識している。エリガーとルドルフはBHS序文冒頭に言う。「キッテルのビブリアヘブライカは四十年後に再度新しい姿をもつて学問の世界に登場する」と。この言葉はキッテル自身のBHK序文冒頭の言葉を思い起こさしめる。曰く、「ビブリアヘブライカはこの第三版において、全く新しい姿で学問の世界に登場する」(一)。両者の原典であるレニングラード写本 (以下L)<sup>③</sup>を基底としつつ、この両者の主張する「新しさ」が何を具体的に意味し、かついかなる問題点

を内蔵しているかをその本文に焦点をあわせて検討してみたいと思う。

二 BHKの新しい姿としてキッテルが提示する諸点の中で最も基本的な重要なものは、原典としてLを採用した事である。彼は印刷ヘブル語聖書の発行にあたり、その第一、二版ともに一五二五年、ヤコブ・ベン・ハイム編んだいわゆる第二ラビ聖書(Miqra'ot Gedolot, 別称 editio Bombergiana, 以下B)を底本として用いたが、第三版を出すにあたりBを去りLに来る。その歴史的推移は当時の印刷聖書の状況と関わり、また殊にパウロ・カールのヘブル語写本研究におけるひとつの学問的方向の模索と密接に結びついている。結論のみを記すと、すべてがただひとつの問題をめぐっている、即ち「マソラ本文とベン・アシエル」。Bのヘブル語本文の中に「マソラ本文」(THE Masoretic text)を見るギンスブルク<sup>⑤</sup>に対し、また「ベン・アシエルの」という折紙つきのマソラ規範書ディクドゥケー・ハテアミームを世に出したペアとシュトラック<sup>⑥</sup>に対して「否」を言ったカールは、その学問的根拠を十一世紀初頭に記されたと言われる、当時のティベリア系二大学派、即ちベン・アシエルならびにベン・ナフタリ学派間のヘブル語本文の相違に関するミシャエル・ベン・ウジエルなる人物の「アダト・ディボリム」<sup>⑦</sup>に見出し、その研究を通して、Lこそはまさにベン・アシエルの伝統を現代に伝える写本である事を確信するに至るのである<sup>⑧</sup>。以上の事の中にわれわれは、キッテルがその第三版以降Lを取りあげた理由と意味を知るのである<sup>⑨</sup>。

## I レニングラード写本 B19<sup>a</sup>

一 写本Lが世に知られるようになった経過において中心的役割を果たすのは、ピナー、フィルコヴィチ、ハアカヴィー<sup>⑩</sup>としてシュトラックである。後二者は一八七五年「聖ペーターズブルク帝室公営図書館のヘブル語写本カタログ」を

公にし、第一フィルコヴィチ・コレクションの全容を説明をまじえて紹介した<sup>⑪</sup>。Lは以前オデッサにあったため第二部にくみこまれ番号はB19<sup>a</sup>。Bはコーデック型の写本を意味する。

その後ペーターズブルクは革命を経てレニングラードと改称され、この写本は世に「レニングラード写本 B19<sup>a</sup>」として知られるに至った。

二 Lのコロフォンの中から幾つか基本的なものを記し多少注釈を加えたい。

(1) 「われサムエル・ベン・ヤコブ、この写本を写し、母音ならびにマソラを付したり。そはわれらの主、メボラク・ベン・ヨセフ、別名ベン・アズダドの榮譽のためなり。生ける者(主)彼を祝福し給わん事を！」即ち(a)彼一人でソーフールまたナクダンとしての二重の働きをしている(この用語についてはII-三項を参照)。アレップ写本においては二者が分離している<sup>⑫</sup>。(b)Lは祭司メボラクに献呈された。あるユダヤ教団の代表者として公的な意味が含まれているのか、単なる一個人が意味されているかが問題となる。それはL全体の性格と関わってくる<sup>⑬</sup>。

(2) 「メボラクこの事をなししは労苦と骨折りともて、額に汗してこの書を読むためなり。願わくは主、彼をその御教えによりて強くなし、御訓しをもて雄々しからしめ、その律法の勉学を通して賢からしめ、その目をみあかしをもて輝かしめ、生きて主の宮の再建を見さしめ給わん事を！ その創造者、彼に永遠の生命——この世とかの世における——を与え、その大いなるあわれみをもて彼をおおい、彼とその子孫とに平和の庵をむすばせ給わん事を！」主の宮の再建を望みつつ書き継がれてゆく聖書、それはふるさとを失ったユダヤ民族のこの世における唯一のふるさとであり、またその存在の基盤であったのである。写本に見られるマソラ学者の仕事(例えばケティープとケリー、ティックネー・ソーフエリム、注目すべき文字また母音)の背後にユダヤ民族の信仰告白がしばしば読みとられる。

(3) 「この聖書全巻はメディアナツ・ミツライムにおいて記され、母音とマソラを付され、また綿密に校正されたり。

完成されしは世界創造四七七〇年シワンの月、即ちエホヤキン王捕われとなりて後一四四四年、即ちギリシヤ人の支配と預言の停止の後(一)三一九年(協定紀元)、第二神殿破壊の後九四〇年、小きき角の支配の三九九年なり。(a)記されたのは「エジプトの町」即ちカイロ。時期は一〇〇八一—一〇一〇年の間で揺れる。(b) *Septuagint* 「協定紀元」なる語は完全に消されている。また「千」は左欄外に書かれている。

(4) 旧約本文学的に特に興味あるのは次の一文。「サムエル・ベン・ヤコブ、この聖なる書の写本を記し、母音とマソラを付せり。そは師アロン・ベン・モーシェ・ベン・アシエルをつくりし、校正かつ注釈されたる書に従いてなり。彼のやすき、エデンの園にあらん事を！かくそれは(II) L 校正され、正しく注釈せられたり。」<sup>(a)</sup> 手本としてのアロン・ベン・アシエルの写本が複数 (*hsfym*) である事が注目される。それらの間にすでに多少の相違が見られた事は想像に難くない。<sup>(b)</sup> それらの写本に従って L が校正された、とあるが後に見る L の多くの修正の跡はこの言葉を裏づける。そしてその中にわれわれはヘブル語写本群という広大な世界の中の様々な伝承の息づきと、写本という仕事に生涯をささげた人々の隠れた労苦の日々を感じとる。

## II 写本と伝承

一 エリガーとルドルフは BHS の序文において言う。「われわれは本文を、L の最終の手 (L の最終的校正者) が提供しているまきにそのように一貫して再現する事こそ正しいあり方であるとみなした」と。それ故に当然「明らかかな書き誤りを取り除く、という事は断念されている」。<sup>(a)</sup> これは BHK 序文におけるキッテルの「明らかかな書き誤りを除いた上正字法は L に従う」という原則的方針に対する批判である。BHS のこの方針は基本的には全く正

しく、殊にある特定の写本を原典として印刷聖書を発行する際にはまさしくそうあるべきものであらう。この序文の言葉をそのままうけて、ヴェルトヴァインはその著「旧約聖書の本文」の中で、「BHS の本文が写本 L を全く正確に (*in absoluter Genauigkeit*, 絶対的な正確さで!) 再現している一方、マソラは……」<sup>(b)</sup> と記す。しかし単に印刷技術上の限界の故のみならず、何よりも写本というものの持つ基本的な特質の故に、このヴェルトヴァインの言葉が多少現実とかけ離れている事は後にくわしく論ずるように BHS 本文自身が証言している。

二 写本の基本的な特質とは他でもなく、写本家なる人間の手によって記されたもの、という事にある。当然と言えばあまりに当然の事ではあるが、旧約聖書本文問題に対してその持つ意味は少なくない。これらの人々はその仕事の内容によって一般に異なった二つの名称をもって呼ばれる。(1) ソーフエリーム (*sfym*)。単数形ではソーフエール、子音本文を記す者。(2) ナクダニーム (*nqdnym*)。単数形はナクダン、母音 (*nqwdwt*) とアクセント (*sfym*) を記す者。マソラ学者と呼ばれる人々は広義では(1)(2)共に含むが、狭い意味では(2)に属する。<sup>(c)</sup> 彼らの課題はマソラを付しつつ本文を厳密に校正する事にある。<sup>(d)</sup>

さて「写本」という仕事は本来私的な仕事ではなく公的な性格を有している。彼らはそれ故自らの判断によってではなく、権威ある伝承に従って仕事を遂行する。彼らは伝承の中にある人間なのである。ところが問題はその伝承が一律でないところにおきる。われわれはソーフエリーム、ナクダニームの背後に種々様々な伝承が息づいている事実を見出す。そしてそれは、ある特定の、高度の権威ある統一された伝承を代表すると言われる写本にも妥当する。これらの多様な伝承は最も大きな形では、西方系 *na'arba'e* (II タイムリア系) と東方系 *madin'ar'e* (II バビロニア系) に分かれる。前者はさらに代表的な二大マソラ学者の名にちなんで、ベン・アシエル (*baen as'er*) 系とベン・ナフタリ (*baen naf'alai*) 系にわかれる。<sup>(e)</sup> この西方系伝承と一線を画す第三の流れはパレスチナ系伝承と呼ばれる。エダ

ヤ教の祈禱書マハヅル・ヴィトゥリーの中に以下の一文が見える。「かくしてティベリアの句読法はわれわれのものとは似ていず、またこの二つはイスラエルの地の句読法とも似ていない。」語っているのは疑いなく、バビロニア系伝承の中にいる人物である。西方系ならびに東方系伝承については十三世紀初頭に記された「ヒルク・ハカライム・ウエハラ・パニム」の中の一文が興味深い。」そして彼らは再び律法の書に西方と東方における読み相違を見出した。ある者はこのように言い、ある者はそのように言う。ある者が不完全形にと学ぶものを、他の者は完全形にと学ぶ。ある者は一字に書くこと学ぶのに、ある者は二字にと学ぶ。マソラに関してある者が学ぶ事を、ある者はアクセントに閲して、と学ぶ。かく膨大なマソラが西方にも東方にもある。「一見して西方―東方間の伝承の相違の大きさが目につくが、その実、問題は非常に微妙で専門的なマソラの規定に閲してである。バビロニア地域へのマソラ伝承の伝播に関しては、第一ラビ聖書第一巻巻末に印刷されているディクドゥケー・ハテアミームの補遺にある次の一文がその消息を伝えていている。「これがエフスイの子、エレアザルの子ラビ・ドゥッサの伝えたマソラである。彼(ラビ・ドゥッサ)はバビロニア人ラビ・ヤエフダよりこれを受け、彼(ヤエフダ)はその父シメオンよりこれを受け、彼(シメオン)はラビ・アダよりこれを受けた。そしてラビ・アダはネハルデアよりこれを持ち来たったラビ・ハマヌナから受けたのである。そして彼(ハマヌナ)は、イスラエルの地よりバビロンに追われた心清き人々からこれを受けたのである。それはイスラエルの地から律法の書を抹殺すべく、ルフスが彼らを追放したからである。」このルフスを、バル・コクバの反乱に際しユダヤ人に残酷な行為をもつて報いたアンニウス・ルフスと理解すれば、上記の一文は紀元後二、三世紀、バビロニア地域にユダヤ教アカデミーが根をおろした事の証言となる。その後スラとネハルデアにおいてユダヤ教アカデミーは榮え、ネハルデアが二五九年に滅ぼされた後もその伝承は生き続け、九世紀に入るとティベリア学派をしのいでバビロニアはユダヤ教の事実上の中心地となった。多くの西方系写本のマソラの中にも、この二つの町の名が

異なったマソラ伝承を伝える学派の名称としてしばしばあらわれる。

三 以上のような複雑な伝承は程度の差こそあれ、どのような写本にも浸透している。その意味では純粋な西方写本また純粋な東方写本というものは存在しない。この事はベン・アシエル系写本の代表的存在、カイロ預言者写本(以下C)とアレップ写本(以下A)、またカールがこれこそまさしく東方系と主張したベルリン写本(Codex Berlin Or. Qu. 680)にも受け継がれている。

バビロニア系写本として最初に世に知られたペトロポリタヌス(レニングラード預言者写本、略号P)においては東西の伝承が一層深く混合しており、本文の読み(ケタイプ)と全く矛盾する小マソラがついているケースが少なくない。これらは明らかに後期のマソラ学者による「西方化」の試みである。すでに第二ラビ聖書の巻末マソラによって世に知られていた、西方―東方両学派の読み相違のリスト、ヒルフィム(Hilfium)は、さらに英国のポードライアン図書館のいくつかの写本、そしてLの巻末マソラにも見出される。預言書と諸書の読み相違がおよそ二百六十挙げられているが、それらの箇所を調べてゆくとC、Aにも時折繊細な修正の跡が見出される。これらがモーシエ・ベン・アシエルまたはアロン・ベン・アシエルに直接由来するものか、あるいは後期のものか確定は困難ではあるが、少なくとも伝承の写本に対する意義はこの一事において明らかとなる。カールがまさしくベン・アシエル系と宣言して世に出た、BHK、BHSの原典であるLは後述する如くC、Aに比べはるかに混合した伝承の型を示している。そしてそれがマソラ学者の校正の対象となる。問題はこの校正が一義的に明確に読みとれない時に生ずる。子音に関する校正はほとんど読み取れるが、母音、アクセント、ダーゲシユ、ラーフェ、メセクになるとかなりむずかしいケースが生ずる。それゆえ原典の読みの再現―印刷という仕事に携わる者は二者択一を迫られる事となる。BHKとBHSはこのような問題に直面した場合、少なからざる箇所でも異なった判断を示している。同じ原典を用いつつもBH

KをBHKたらしめ、BHSをBHSたらしめているものがそこにある。そしてそれは次代に対する絶えざる研究への呼びかけでもあるのである。それ故キツテルはその没年、BHK第三版の序文の最後に、そしてこれを受けて、エリガーとルドルフもまたBHS序文の終りに「ひと日(他)のひと日を教う」(dies diem docet)と記すのである。

### III BHSの本文

BHSの本文は以下の五項、即ち(1) *sic!*、(2) *L\**、(3) 典型的な異読、(4) 複雑な読み、(5) BHKの影響、において分析され得よう。上記五項の中でBHSをBHSたらしめているものの最も顕著なものは *sic!* である。*sic!* は一般的に言えば釈義に関わる問題に最も遠く、その意味ではあまり興味をそそるものではないが、ヘブル語写本の伝承という点に関しては第二項の修正問題と共に少なからざる意味を持っている。それゆえ今回はこの問題を取り上げ、その事を通してBHS本文の性格と問題点を検討してみたい。*sic!* (レニングラード写本ではそう) はBHKのフパルトにもまれに現れるが、その出版の基本方針が「Lを忠実に再現する」事にあるBHSでは、はるかに頻繁に見出される。*sic!* がいつているLの読みが多少問題を含んでいる、という事が暗黙のうちにて了解されていて、フパルトには *sic!* の後に *mlt* *Mss* *Edd*... (多くの写本、印刷聖書においては) という非常に概括的な証言が続き、一般的に言っていてそれが標準的、あるいは正しい読みである事を示している。しかしながらこの *sic!* なる表現の中にヴェルトヴァインのように、Lの読みに対する忠実さという意味において、BHS本文の「絶対的精確さ」を見るときれば、われわれはBHS本文の性格を見失う事になる。結論的事柄は後に述べる事とし、まず創世記に見える四十箇所 *sic!* を検討する。これらは一見まとまりのない様相を呈しているがまとめると幾つかの型に分類される。

一 ダーゲシュ。(1) ダーゲシュ・レーネ。① *’abdqā* 「あなたのしるべ」創 32・5。フパルトに *sic!*, *mlt* *Mss* *Edd* *’dqā*。単純な見誤りによるものでLには明白に *’abdqā* とダーレーナに正常なダーゲシュ・レーネ。② *yifgāskā* 「彼(エサウ)があなたに出会う」創 32・18。ギーメルのダーゲシュは自然に見える。しかしフパルトに *sic!*, *al gā* (*gā*) *c raphe*。これはBHKのフパルトに由来。これが実はヘブ来印刷聖書の読み *yifgāskā* に由来。この読みはダマスコ五書(以後DP)にも見出される。③ それに対し、B、BHK共に *gā*。BGDKPTのダーゲシュ・レーネに関し、Lはメセクに関してと同様、多くの修正の形跡を残している。それは単にナクダンの書き誤りというのではなく、異なった写本伝承を反映しているように見える。多少問題を異にするのが前置詞 *u* と *k* によく見られるダーゲシュとラーフェの同時存在(正確に言えば不完全な修正)。CとAにはほとんど見うけられないがLにおいて非常に頻繁に出会うこの現象は、文脈のアクセントとの関連で説明がつく場合が多い。このような問題は、写本完成へのプロセスに関わっているよう。文脈のアクセントとダーゲシュとの相互関連が徹底して検討されていないため、L本来の読みが退けられているケースがBHK、BHS共に時折見うけられる。④

(2) ダーゲシュ・フォルテ。(i) 未完了接続形に関するものは① *wayissā’er* 「そして彼は残った」創 7・23。② *way-aggaed* 「そこで私達は告げた」創 43・7。五書では *wayigdal* 出 2・10 が挙げられているが *wayah’bos* 創 22・3。③ *wayiwāleed* 民 26・60 等には *sic!* がついていない。ダーゲシュ・フォルテを持つ正常な読みが本文に提供されている(注意を要するのはBHSの誤植、例えば預言書では *wayihka* 士 20・23 *wayiqal’sā* サム 17・6 *waya-gged* 王 19・20 いずれもLはダーゲシュを持つ)。この種の読みは大半はナクダンの不注意に起因しようが例外もある。(ii) 定冠詞に関わるものは例えば *hasiddim* 「シビヤーム」創 14・10。Lはすぐ前の 14・8 においても同じく *hasiddim* を持つが、BHSは *hasiddim* と正常の読み。BHSのとおりあげている他の箇所は 15・10、31・51、

41・24。I全体にわたるこのようなケースは多く列挙しないが多少問題がある一列を記す。サム下20・12には二度「その大路」が現われる。そのひとつはBHSで *hamm'silā*, 明らかにBHKの読みを輸入。Iの実際の読みは *ham'e* と *mem* に *da* ゲシ ヌ なし。同じくB。他方CとAは *ham'e* と *mem* に *na* フ・*pa* タ、*da* ゲシ ヌ なし。一般に定冠詞に続く *mem* が シ ヌ フ を持つ時、*mem* は *da* ゲシ ヌ ・*fo* ルテ を持たず定冠詞の *pa* タ に *me* セク が つく。例をば *ham'ba-q'sim* 出4・19' *ham'usāqā* イザ23・12' *ham'zamm'rōt* エラ52・18。しかしこれらの問題がナクタン自身にも十分で明らかでなかった事はIに見られる多くの修正の跡が物語っている。常に *da* ゲシ ヌ の省略されるよく知られた例は *hal'wiyim* 「ハビ入」。

(3) 正則音 *da* ゲシ ヌ (*Dages' orthophonicum*)。これは(1)と(2)に比べてはるかに複雑な伝承の様相を示している。BHSが認めている創世記の読みは① I16 「彼だ」創24・36 (ラーメドに *da* ゲシ ヌ、以後次項のマソラの *da* ゲシ ヌ ままでこの種の読みをラーメド二つで表記する) ② II'ya "qob 「ヤコブだ」38・19' ③ III 「私だ」38・16' ④ IIak 「あなただ」38・18' ⑤ IIah 「彼女だ」38・18。それぞれの読みの前である語とそのアクセントを見ると上記の読みである *da* ゲシ ヌ は通常の音調 *da* ゲシ ヌ ・*fo* ルテ (*Dages' forte euphonicum*) の範疇ではくみこまれ得ない事がわかる。BHKは上記五箇所のいずれにも *da* ゲシ ヌ を受け入れていない。われわれの目で見なければならないのは当然である。しかしこの種の *da* ゲシ ヌ はロイヒリン預言者写本 (R) ④ またヒマンフト第三写本 (E3) にはごく普通にあらわれる。フランツ・デメリッチはヒメネスのポリプロタのヘブル語本文を取り扱った論文の中でE3に触れて次のように言う。„Erfurt. 3 dagesirt in der Regel jeden nach vorausgegangener geschlossener Sylbe anlautenden und raphirt jeden in-oder auslautenden Consonanten (ausgenommen die Gutturale).“ *h'w'lym* ・*h'w'lym* により「ハセウエ・ベン・ナフタリ (Ps BZ) に帰されるこの種の *da* ゲシ ヌ が I の中に頻繁に見うけられる事は興味深く、I が混合した伝承を持つひとつの証言となろう。BHSはこの点でBHKよりもI本文により忠実であると言えるが、他の多くの箇所では *da* ゲシ ヌ を無視、当然 *siel* もなく。注目すべきは *le'mor* 「口へ」(例えば王上8・55、BHSは *le'mor*)。これは実によくIに現れるが、ほとんどの場合後期の手によって修正されように見える。BHKが珍しくもこの種の *da* ゲシ ヌ を認めているのは *le'mor* 民5・11と II'ka 歴代上22・12。これはBHSにもそのまま受け入れられているが興味ある事に *siel* はない。後者の例ではAに修正の跡が見られ *da* ゲシ ヌ が消されている。しかし一般的にはCとAはこの種の *da* ゲシ ヌ、あるいはその修正はほとんど見当たらない。Iのナクタン、サムエル・ベン・ヤコブはこの問題でずいぶん頭を悩ましたようである。

(4) マソラの *da* ゲシ ヌ。Iに見出される一見不可解な *da* ゲシ ヌ の中でマソラの伝承の中でのみ正しく理解し得るものがある。創世記における例は38・9。I' BHS共に I10'。I' *siel* *Mit* *Miss* *Edd* I10'。文脈は *wayyeda' ōnān* *ki* *llo' lo' yilyā hazzāra*。下記で述べるようにこの文脈の中での否定詞 *lo'* の *da* ゲシ ヌ は異常に見えぬ。しかしこの件に関しIの大マソラ (箴言26・17) は次のように言う。「*lo'* は (全旧約聖書中) 六箇所において *lo'* の *si* ヌ を伴う (= I10')、即ち創19・2' 38・9' サム上8・19' *h'w'lym* 2・6' 1・6' 箴26・17。④ これら六箇所で *lo'* の前の語を調べると以下の結果となる。創19・2' サム上8・19' は *wayyo'm'ra* が最後の音節に接続アクセント *Mānah* を持つ。同じ事が *h'w'lym* 2・6' の *hammarbā* にも妥当する。それゆえこれの三例は音調 *da* ゲシ ヌ ・*fo* ルテのひとつ接続的 *da* ゲシ ヌ ・*fo* ルテ *Dages' forte coniunctum* と理解される。他方他の三例においては事情が異なる。*h'w'lym* 1・6' と箴26・17' は *lo'* の前の語が子音で終る *h'w'lym* (*miskānōt, rib*)' 創8・9' おおづば *wayyeda'* 「彼は知っていた」の目的文章を導入する *ki* に切断アクセント *h'w'lym* が付されており、その後に来る *lo'* の *da* ゲシ ヌ は接続的 *da* ゲシ ヌ ・*fo* ルテとしては理解できなく。これらの *da* ゲシ ヌ は *lo'* のすぐ後に発音上区別しなく

い「*io*」彼に「が続いているため、ナクダニームが両者を明白に区別するために付したもののようである。正則音ダ  
ーゲシエの一種とも考えられる。いずれにしても以上の事より創38・9の *io* はマンソラに従えば全く正常である事  
がわかる。D P も *io* を持ちその小マンソラ *sp. s. a. (六度)* ダーゲシエは *io* ならばに B の大マンソラの言及に一致。  
それではなぜここにわざわざ *sicL* がついたのか。より明確に言えば問題の六箇所の中で他の五箇所には *sicL* がな  
く、なぜただ創38・9のみそれがついたのか。答えは明らかである。六箇所を写本では C、A、L として D P、印  
刷聖書では B、BHK、BHS を調べると BHK においてのみ二箇所、即ち創38・9 と ハバ 1・6 で不正確な読みが  
印刷されている事が見出される。L はマンソラに従ってこの両者にも *io* とダーゲシエを持つが BHK は *io*、BHS  
は L の読みを正しく再現しつつも BHK の *io* をあるべき読みと判断し、本来不要なアバラトによって「正常な」  
(しかし現実には BHK の誤った) 読みを読者に知らしめようとしたのである。<sup>④</sup>

二 イェビーク。① *ae. saeah* 「私はつくろう」創2・18。L のこのページの保存状態はよくないが、それでもハ  
ー (he) の中に点が確認でき BHS はこれを受け入れ、アバラトに *sicL*, *mlt. Miss. Edd. B.* 同じように理解に苦  
しむのは ② *israh* 「彼(ヨセフ)はした」とその夫に訴えるポテパルの妻、創39・19。L の読みは小さな「点」を持  
つ。BHS はこれを受け入れるが BHK は上記二例ともこれを受け入れない。D P はハーにラーフェを持ち誤解の余  
地をなくしている。L はハーの中にしばしば問題を感じさせる「点」を持つ。③ *morehaem* 「彼らのロバ」創34・28  
(BHS) のような例は特に挙げられていなくとも数多い。特に目立つのは、三人称女性単数形のサフィックスのつ  
く形で、そのハーにマッピークと母音カーメツの両者が時間的経過の中で前後して付されたと思わせるケースが少  
なくない事である。例えば *ebia* 「彼女の父」創31・35、*ebina* 「彼女の兄」創24・53、*alaha* 「彼女(その町)に  
対して」申20・12。これらのケースで L はいずれもサフィックスのハーは母音カーメツを持つがハーの内部に「点」

が確認できる。他方あるべきマッピークが欠けている例も少なくない。例えば *gaboha* (イザヤ2・15、30・25、  
40・9)。いずれも BHS は *sicL* をもってこれを示している。C、A は三箇所とも正しく *gaboh*。創世記では38・26  
*Idaia* と *l*、BHS。しかし BHK は当然要請されるマッピークを付し *Idaiah* 「彼女を知る事」。同じく D P して  
B。BHS が沈黙している例は *sall'ah* 「彼女を追出す事」申22・29。しかし L は *sall'ha* とハーにラーフェ!  
BHK のアバラト (*L. sall'ha*) を見のがし、その修正すみの本文の読み *ah* が BHS に単純にひきつがれたもの。

三 母音。問題のある以下の二例を検討する。① *hanasim* (BHS) 「その人々」創19・5。しかし L は疑問の余  
地なく *hai* とアールフェとハッテフ・パタ。同じく D P、B。多少複雑なのが次の一例。② *ta'se* 「あなたがする」  
創26・29 と BHS はシンに母音ツェレを持ち L を正しく再現している。そこまではよいが、*sicL*, *mlt. Miss. Edd. sse*  
と本来無用なアバラトをつけている。BHS の小マンソラは *d* (四回)、しかしこれは不正確で L の小マンソラは *id* と  
母音ツェレを持つ。すなわちシンにツェレを持つ形が旧約聖書に四度現れる、とこの小マンソラは言う。創26・29 の L  
のマンソラによればこれら四箇所は創26・29、ヨシ7・9、エレ40・16、サム下13・12である。この大マンソラをおそら  
く見なかった BHK はいつものように無言の「修正」をして、創26・29 に *ta'se* と母音セヨールを持つごく普通の  
形を印刷した。これを「正常」と見た BHS の校訂者は、L が母音ツェレを持つ事を認めつつも、それがナクダンの  
書き誤りであると判断して、その事を示すべく上述のアバラトをつけた。もし BHS がツェレを持つ L の読みそのも  
のを異常と認め、そのためこのアバラトをつけたのであれば他の三箇所にも同じアバラトがつくべきであるが、事実  
はそうではない。BHK は、その三箇所では *ta'se* (シンにツェレ) を持っているため、BHS はアバラトをつけ  
なかつたのであろう。ウマイルもその、*MASSORAH GEDOLAH*「同じ誤りを犯して、L の大マンソラにはない母  
音記号を補足の意味でつけたところまではよいが、*ta'se d*」とシンに母音セヨールを付した。*ta'se* は四回どころ

か旧約聖書に百回以上も現れる。L, DPそしてBともに創26・29でツェレを持ち正しくマンラの伝承に即している。パレスチナ系句読法を持つ写本にはカーメツとパタ、ツェレとセゴールの明確な分離は見出されず、また同じ事がRにも妥当する。これらの厳密な区別はベン・ナフタリ、ベン・アシエルの西方二大マンラ学者の時代に確立されたようである。<sup>⑧</sup>カーメツとパタ、ツェレとセゴールは相互の修正がたやすいために、Lにこの点における修正があったとしてもそれを見出す事は困難である。

四 yshw(w)問題。①創27・29には二度「彼らは伏し拝む」が現われる。BHSではまず w'yistah<sup>a</sup>wu, そして w'yistah<sup>a</sup>wā(最後から二つ目の・Wはワウがダーゲシュを持つ事の表現。BHSを参照)。BHSが問題にするのは後者の読みで括弧内で言及したワウの中のダーゲシュに関してである。同じ問題が49・8にも見られ(yistah<sup>a</sup>wā)フパラトはいずれのケースも ,sicl, mlt Mss Edd-wā<sup>a</sup> 母音シユレク(ā)の前の「子音としてのワウにこれまた母音らしきダーゲシュがついているのは不自然に見える。BHSの ,sicl が言及している五書における他の例は w<sup>a</sup>hi-stah<sup>a</sup>wā 出33・10。BHSは言及していないがLにはさらに創42・6でも同じ現象が見出され wayistah<sup>a</sup>wā。

BHKは申29・25で本文に・wāをとり、フパラトに ,l, s<sup>a</sup>ā<sup>a</sup>と正確を期しているように見えるが創42・6と民25・2ではフパラトがなく、本文は・wā 興味あるのはAが創27・29と申29・25において・wāを持つている事である。五書の他の三箇所はAが破損しており現存していないので残念ながら校合し得ない。Aが・wāを持つ預言書における例は士師2・12, 2・17(L, BHS共に wā)。BHSはそのイザヤ書初版では45・14, 46・6, 49・7の三箇所( w<sup>a</sup>) yistah<sup>a</sup>wāを持つていたが新しい版ではすべて・wāとし「フパラト ,sicl…」をつける。Aはこれら三箇所ですべて・wā 伝承の複雑さを示す一例である。あえてこの種のダーゲシュを解釈すれば、問題のワウが子音である事を明示するしるしであろう。Rにはワウにだけでなく、アーレフまたヘーにもこの種のダーゲシュが現れる。

②創43・28ではL, BHS共に wayistah<sup>a</sup>wu(・wāではなく)「そして彼ら(ヨセンの兄弟達)は伏し拜んだ」。  
フパラト ,sicl, mlt Mss Edd-h<sup>a</sup>ww(=h<sup>a</sup>wā)“子音それ自体は単数形(-lahū=lah<sup>a</sup>wā)であるが、母音キツン  
ーツによって複数形として読まれている。それゆえフパラトの言うように明確な複数形-lah<sup>a</sup>wāの方が自然である。  
しかし自然であるという事は本文研究にとって重要な事ではない。マンラ学者は関連するテーマをとりあげ  
る。オクラ・ウエオクラ、フレンスドルフ版No.119は、語尾にワウを欠くがそれがあるものとして読まれる十八語  
を挙げている。<sup>⑨</sup>この中で w'yistah<sup>a</sup>wu(創27・29)と wayistah<sup>a</sup>wu(創43・28, 王上9・9)が挙げられている  
(母音はフレンスドルフによる)。

同じ事がオクラ・ウエオクラ、エステバン版No.105<sup>⑩</sup> Bの大マンラ(王上11・1), Bの巻末マンラ(W-18)にも述べられている。すなわちこれら三箇所では・wāと単数形ではなく、・wāと複数形に読むべきであると上記のマンラは言う。他方、マセント・ソーフエリム第七章は同じテーマながら十四語のみを挙げ「伏し拜む」に関する上述の三箇所は挙げられていない。<sup>⑪</sup>以上の事より歴史的経過の中で、マンラ学者の間で見解の相違が生じた事が認められる。これら問題の三箇所を写本で調べると次のようになる。

③創27・29。LはBHS通り w'yistah<sup>a</sup>wu, 小マンラは(母音のみ)wyshtww q. DPは・wuwと矛盾した読み。このページは後期の手により上書がなされている。本来の読みは・wuであろう。Aは・wuとワウにダーゲシュとキツブーツをあわせ持つ。フルコヴィッチコレクションの中で西方—東方系、スラーネヘルデア系の読みに関するマンラを持つ写本を研究したシユトラックは、以上の点にかかわるマンラを見出している。即ちマッシュェフトカレ・ローデックス No.30 (Cod. Tschuf. 30)は創27・29に二つの小マンラを持つ。④g/kt'kn「二度このように書かれた」(即ち-h<sup>a</sup>wu)。<sup>⑫</sup>Imdh<sup>a</sup> wyshtw kt'wkn q「東方の人々は wyshtw と書き、そのように読む」即ち w'yistah<sup>a</sup>w

単数形に読む。他方マッシュェフトカレ・ローディタタス No.66 (Cod. Tschuf.66) のマッシュェフトカレは西方系の読みに関する No.30 と一致しているが東方系の読みに関するのは反対の主張をしつづける。即ちマッシュェフトカレ派は *wyšhww* と書き、そのよう (=*w'yishah'wā*, 複数形) と読むと言ふ。

⑥ 創43・28。L' BHS 共に *wayyishah'wu*, マッシュェフトカレ *wyšhww q'* (上記②を参照)。D P は *-wu* の中に *ダーゲシヤ* なく、マッシュェフトカレ *N wyshww qry* (最初の文字は NSH' Ⅱ 読み、異読を示す)。

⑦ 王上9・9。L' BHS 共に *wayyishah'w* と異なる読み。BHS の *sicl* なく、マッシュェフトカレ *nonn Miss ut Q-wā'*、他方 A は *-h'wu*。マッシュェフトカレ L' 共に *wyšhww q'*。以上⑥⑦⑧の三箇所において問題の語は決して一様に伝承されていない事がわかる。注目すべきはネハ8・6のLの読み *wayyishah'wu*。これは上述のオクラ・ウエオクラ、Bの大マソラと巻末マソラに間接に矛盾。西方と東方のマソラ学派の読みの相違のリヌ・*hillafm* がLの巻末マソラの中に見出されるが、そのおよそ二百六十箇所に及ぶ問題のひとつはネハ8・6をとりあげて言う。

「西方の読みは *wyšhww* (*wayyishah'wu*)、東方の人々は *-tahā* (単数形) と書き *-tah'wā* (複数形) と読む。」同じ内容のマソラがマッシュェフトカレ No.81 (Cod. Tschuf.81) にも見出される。これのサンプのマソラ学者の証言によればLの読みは東方系ということになる。

見なれない *-wān* (Lでは創43・28、ネハ8・6。Aでは創27・29、王上9・9) の解釈は二つある。ナクダンがまず最初に単数形に *-wān* と母音シレクで読み、後に複数形にするためキップーツを付し、そのさいシレクのダーゲシヤを消さずにおいた、あるいはこのワウが子音であって母音ではない事を明示する目的を持つものかのいずれかであろう。前者の方が事実に近いと思われる。ワウの中のわれわれの目には見なれないダーゲシヤはしかしLのここかしこに、とくに接続詞ワウに関して見うけられる。例えば *w'yesh'dā* (創34・21) *w'yisharackā* (申14・23) *wayyiqqah* (士師6・27) *w'ei* (王上24・14) *wayyiqqah'ā* (歴代下5・3)。いずれも *ay* (A) と *ayn* (・) との結合で、それらが直接にワウ (w) の後にあるため母音文字として読まれる危険を防ぐべく、ワウの発音を強調したものであろう。

五 結論的事項。sicl に関わるBHS本文の問題点を要約すると次のようになる。

(1) ある箇所の読みには *sicl* がつき、全く同じ形が出てくる他の箇所では *sicl* がつかず、本文に、一般的にみて正常と思われる読みが印刷されている場合が少なくない。

(2) BHS が BHK 本文の影響により判断を誤っている事も少なくない。この種の誤りは二種にわかれ、(a) BHK 本文の不正確あるいは修正済みの読みをしそのものの読みと思ひ注釈なしに本文に取り入れたケース。(b) Lの正しい読みを BHK が「修正」しているさいに、BHS は Lの読みを本文にとりつつも、「正しい」(現実には BHK の誤った修正の) 読みを讀者に示すため本来無用な *aparat* *sicl*… をつけた場合とである。

(3) 以上の事と密接に関連するのは、*sicl* という表現に含まれる暗黙のニュアンス——即ち *sicl* のついでに読みが問題のあるものであり、*aparat* に挙げられている「多くの写本と印刷聖書」の読みが正常であると言う——は必ずしも正当であるとは限らない、という点である。Lの読みの微妙なケースは他のベン・アシエル系写本との校合によって明らかになるが、BHK も BHS も最も重要なベン・アシエル写本、即ち A との校合はできなかったし、また C として大英博物館の五書写本 Or. 4445 との一貫した校合はしていないように見うけられる。ちなみに Or. 4445 は BHK, BHS の *aparat* に顔を出していない。

(4) さらにまた、マソラの方面からの本文問題のついでに取扱いもあまりなされていないため、不明確な読みに出会うと「客観的」な判断を主観的に下してしまい、マソラの伝承に従ったLの読みを正しく再現していないケース





